

# じょうこうじ 掟光寺だより

令和6年  
11月号

## お寺の行事案内

●11日(月) 13時半〜  
「宗祖報恩講(御講さま)」



## 紅葉とありのままの姿

今年もあと2カ月になりました。早いものです。11月は紅葉のシーズンで各地の観光名所にはたくさんの方が訪れると思います。

紅葉といえば、歌の中に、

裏をみせ  
表をみせて  
散る紅葉

という歌があります。有名な良寛和尚の辞世の句です。

良寛さんは江戸時代後期に生きられた曹洞宗の僧侶です。お寺を持たず妻子を持たず、お釈迦さまと同じように諸国をまわり、その生涯を托鉢による質素な暮らしを貫いた方です。

仏教に「頭陀行」という修行(衣食住に対する欲望などを払い除く修行。三衣一鉢という言葉があるように、托鉢の修行を受ける一つの鉢と三種類の衣という最低限のものしか持たない)を实践された方でしょう。



そんな質素な生活をしながらも

心は豊かで温かく、簡単な言葉(格言)によって一般庶民に解り易く仏法を説きました。また、「子どもの純真な心こそが誠の仏の心」とし、子どもたちを愛し積極的に遊んだと言われています。

托鉢をしに里に出てきたのに、子

ども達と毬つきで遊んで一日を過ごしてしまったりとか、隠れんぼをしている時に、夕方子ども達が家に帰ったことに気付かず、いつまでも隠れていたとか、泥棒に入られた際、何も盗るものが無いと哀れみ、煎餅布団をやったとか、その素朴な人柄、子ども好きを表すエピソードが多い方です。そんな自分を偽らない素朴で温かい人柄が今日まで有名な理由かもしれせん。

そんな良寛さんの辞世の句と云われているのがこの歌です。紅葉が裏を見せ、表を見せてひらひらと散るように、人間もさまざまに裏と表の人生がある。その裏を隠して表の部分を見せようとして背伸びするのではなく、散る紅葉のようにもっと自然のままにありのまま生きよという歌です。まさに良寛さんらしい歌です。



この歌を聞いて思い出したのが、いつも私が引導文(お葬儀の時、故人に引導を渡す際の文言)の一説です。

・・・釈迦牟尼世尊の空の徳に乗じては本國法身の寂光に遊ばんことと、それ掌を指すが如し・・・

故人の旅立ちの安心のために、娑婆世界有縁の菩薩(上行・無辺・浄行・安立行)をそれぞれ火・風・水・地の徳に当てる表現し、お釈迦さまは・・・と続く箇所です。

言いたいのは、この掌の部分。お釈迦さまの手のひらであるから安心しなさいということ。

仏さまの手のひらと言えば、西遊記です。主人公の孫悟空が仏さまと「孫悟空が仏さまの手のひらから出られたらそなたの勝ちだ」と勝負をしました。その結果、孫悟空は飛び出したと思っただけの手ひらから全然抜け出せてはおらず、負けた罰として、三蔵法師が来る500年山に潰されていたというエピソードです。

これは仏さまがどんだけすごくて強いのかと表現したのですが、ある意味では、私たちもどこまで行っても何をしていても仏さまにお見通しなのだから、自分を偽らさずジタバタせずありのままにしたいということ、良寛さんの辞世の句に通じるものがあると思います。

